

「昼、主は命じて慈しみをわたしに送り、夜、主の歌がわたしと共にある、わたしの命の神への祈りが(詩編 42:9)。「主(Yahwe)」は命なる「神」。そんな神への「祈り」が、「主の歌」となる。

夜、主の歌は私の祈りとしてあり、昼「慈しみ」をいただいて働く。祈って働き、働いて主の歌をうたう。

ヘッセは「祈りは歌のように神聖で、救いとなる。祈りは信頼であり、確認である」と言った。カフカは「祈りや芸術は、ともに暗闇に差し出された手だ」と言った。

祈りは、意志や可能性で粹取られた「私」を超える領域へ「私」を差し出す。その「私」は信頼する神聖な方と歌のように響き合う。

聖霊降臨が起こる数日前、使徒や女の弟子たち、イエスの身内は、あの二階の部屋にいた(使徒 1:13)。「二階の部屋」とは、最後の晩餐がおこなわれたあの場所(ルカ 22:12)。文献学では新約聖書が編纂される以前、使徒言行録は、ルカ福音書の著者が、教会の時をイエスの時につなげて記したものと考える。

最後の晩餐は、師を囲んだ直弟子という閉じられた小集団でおこなわれた。そしてその同じ場所に教会が興され(聖霊降臨)、民族や社会層、性差や慣習差を超える、これまでない共同体が形成される。

ユダ以外の十一使徒の名があげられ(使徒 1:13)、「彼らは皆、婦人たちやイエスの母マリア、またイエスの兄弟たちと心を合せて熱心に祈っていた(1:14)」。

婦人たちに注目すると、マグダラのマリア、クザの妻ヨハナ、スサンナ、その他多くの婦人が見える(ルカ 8:3)。イエスの弟に注目すると、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンがいる(マルコ 6:3)。

なんという雑多な者たち。雑多な者があの二階に集まり、「心を合せて熱心に祈っていた(使徒 1:14)」。森のざわめきのような、歌うような響きが聞こえるではないか。

「主の歌がわたしと共にある、わたしの命の神への祈りが(詩編 42:9)」。祈りは個別のものだが(使徒 2:3,8)、聖霊に満たされ(2:4)、主の歌となり、心を一つに合せた祈りになる(1:14)。数多ある個別の流れが集まり、川となって全世界に送られている(2:9~11)。

時を超え、私たちは日本語でこれを受け継いでいる。そしてここ八ヶ岳からも、祈りがぼつぼつと流れ出し、清冽な溪流になっている。

私たちは祈る。この地で、自分の母語で祈る。祈る使徒や女たちに加えられる構えで、実感を伴う母語で祈り、命の神と結びつく主の歌そのものになる。こんなイメージが思い描けるだろうか(1:15)。

来たる聖霊降臨節には聖餐式をおこなうが、聖晩餐にあずかる時には、私たちはあの「二階の部屋」にいるだろう。そこで直接、キリスト・イエスの命が、私たちに分かち与えられる(ルカ 22:19~20)。

「祈りとは暗闇に差し出された手(カフカ)」であり、私たちはその暗闇を信頼する(ヘッセ)。「わたしの命の神(詩編 42:9)」の暗闇であるゆえ、祈りを一つに響き合わせる(使徒 1:14)。

祈りは、御前で自分を隠しだてしない私だけの歌。その個々人の歌が、一つの響きになって主の歌となる(詩編 42:9)。

響き合う祈りは、聴くことのできる神の歌。エルサレムのあの二階での祈りの響き合いは、聖霊降臨となって世界中に教会を建てた。その祈りと響き合う八ヶ岳伝道所の祈りは、何をもたらずか。響き合う祈りは虚空に消えてしまうことはない。何しろ私たちの祈りは、生ける命の神の歌なのだから。



《おまけのひとこと》

意味ではなく響き 誰かに合わせるのではない 響くに任せて自分を放りだしておく 私の祈りは彼を響かせ 彼の祈りは私の響きとなる そんな主の歌が混沌をゆさぶり 身体は自ずと現れる